

「今後の森林の新たな利用の方向 -21 世紀型森林文化と新たな社会の創造-」（抜粋）

平成 11 年 2 月 18 日中央森林審議会答申

森林では、樹木をはじめ多様な動植物が相互のかかわりの中で生命活動を営んでおり、これらを取り巻く水・空気・土等の多様な要素とともに森林生態系が形成されている。また、森林では、水・空気・土等の循環の中で、こうした生命の営みが繰り返され、木材をはじめ再生産可能な産物を供給しており、森林は、適切な保全を図りながら利用する限り、人に多様な恵みを継続的に与えるものである。

以上のような森林の多様性、相互の関連性、総合性、さらには人間生活とのかかわりをみると、森林は、他に代え難い最良の野外教育や環境教育の場である。

また、特に、子ども達が体験を通じて学ぶ機会が限られている今日、自分で課題を見つけ自ら学び自ら考える力や、心身のたくましさや、次代を担うべき子ども達から失われつつあることが懸念されている。

森林の中では、様々な状況において、自ら判断し、行動することにより、新しい発見や驚き・感動を味わうことができる。「森を学校に」して、自らの行動で体験として、学んでいくことにより、子ども達の「生きる力」が育まれていくことが期待される。

さらに、体験に裏打ちされることにより、知識の広がりや深まりが生まれ、その経験が日常生活態度に実感を伴って組み込まれていくことが可能となる。

しかしながら、かつてのように、日常の中で、子ども達が親や年長者等から森林での遊び方や森林の生き物、森林からの産物の利用等について教えられることがなくなった今日においては、まず、森林とのかかわり方についてのオリエンテーションをはじめ、森林についての基礎的な知識を学ぶことが重要であり、その上で、森林や環境について、より深く学び、理解していけるよう、活動を行う者のレベル等に応じた多様な森林環境教育の機会を子ども達をはじめ多くの国民に提供していく必要がある。